

慢性閉塞性肺疾患（COPD）について

健 康

通 信

常陸大宮済生会病院

呼吸器内科
中山 雅之 先生

COPD（慢性閉塞性肺疾患の略）は、たばこの煙を主とする有毒物質を長期間吸入することによって、肺に炎症を引き起こす病気です。この病気の患者数は増加していて、2020年までに全世界の死亡原因の第3位になると推測されています。

日本で2000年に行われた調査では、40歳以上の成人の8.5%、530万人がCOPDに罹患していることが明らかになりました。一方、調査でCOPDと診断された人の90%が、それまでにCOPDと診断されていませんでした。

主な症状は慢性の咳、痰と体を動かす時に出現する息切れですが、ゆっくりと進行するため、早期に気

づきにくいことが特徴です。重症になると、息苦しさのために日常生活が遅れなくなる、風邪などをきっかけに急な症状の悪化（増悪）などを繰り返すこととなります。

早期の診断には、呼吸機能検査が不可欠です。禁煙と適切な管理により、予防と有効な治療が可能な病気です。また、COPDの発症を予防したり進行を遅らせたりするためには、禁煙が最も重要です。さらには、インフルエンザワクチンや肺炎球菌ワクチンの接種も大切です。インフルエンザワクチンは、増悪によるCOPD死亡率を50%低下させることが報告されています。

軽症の場合では、症状の軽減を目的に、必要に応じて気管支拡張薬（気管支を広げる薬）を使用します。中等症では、症状の軽減に加え、生活の質の改善、運動能力の改善などが主な目標となり、気管支拡張薬の定期的な服用と、呼吸リハビリテーションがすすめられます。

重症の場合の薬物治療は、効果に応じて複数の気管支拡張薬が併用されます。呼吸不全（呼吸器能の低下により、十分な酸素を臓器に送れなくなった状態）を合併する場合、在宅酸素療法が行われます。

またすべてのCOPD患者に、身体活動の増加・維持が求められています。

40歳以上で喫煙歴があり、咳、痰が長く続く場合や、階段や坂道での息切れに気づいたら、医療機関を受診して呼吸機能検査を受けることをおすすめします。

